

夢い人丸姫

町内の桜の名所といえば、人丸神社を思い浮かべる人も多いのではないのでしょうか。子育ての神として信仰を集めており、平家の武将であった平景清たいらのかげきよの娘、人丸姫がまつられています。春の祭礼(4月1日・2日)を迎える人丸神社。人丸姫に想いを寄せてみませんか。

①父に一目会いたくて…

ときは平安末期。平家の武将、平景清は平家滅亡後も源頼朝(みなもとのよりとも)の首を狙ったため捕えられ、日向国(宮崎県)へ流されました。その景清の娘、人丸姫は幼くして母を亡くしていたため、伯父のいる京都に移り住みました。

姫が12歳を過ぎたころ、父が日向国で生きると知り、恋しさがつのること約3年。15歳の春に伯父を説得し、乳母とともに父に会いに行くことにしました。心配する伯父から「筑前国(福岡県)の独鈷寺(とっこじ)をたずねよ。知人の僧がいるので、消息を聞いて日向国へ向かうとよい」と助言を受け、京都から旅立ちました。

②願いかなわず

まだ子どもの姫にとって、旅は過酷なものでした。やっとの思いで独鈷寺に着いたときは秋になっていました。そのときすでに父景清は病で亡くなっていましたが、僧は姫に悲しい事実を話すことができません。「日向国はまだ遠く、道中は山賊もあり危険です。春まで待ち、ともに京都へ帰りましょう」とさとししました。姫は泣く泣く、受け入れたのでした。



▲参道の桜



▲人丸神社

③姫までも…

長旅の疲れもあり、姫は突然病におかされました。そしてとうとう、「父に会えず残念ですが、私の死後は日向国の方向に葬り、塚を築いてください」と言い残し、亡くなりました。そしてその遺言どおり、下府に塚が築かれました。

④受け継がれる思い

姫の死から500年以上が過ぎ、塚は荒れ果ててしまいました。下府の農民、十三郎が塚で草刈りをしていると、突然白無垢を着た少女が現れました。十三郎は驚き、高熱で寝込みました。それを聞いた庄屋の三郎助は塚のあたりと悟り、塚をきれいに清めました。すると十三郎はたちまち良くなり、相島から石を運び、塚を建てました。これが後の人丸神社といわれています。

そして今、人丸神社では景清と人丸姫の逸話から、春の祭礼で「親子笹」を頂いて帰り、子どもの成長と健康を願う風習が残っています。



▲親子笹